

自らの学びを高める子どもの育成

札幌市立澄川小学校

I みんなで学び、みんながひとり立ちできる学習の創造

1 自らの学びを高める子どもの育成

2 テーマの意図

本校の児童は、明るく、素直で伸び伸びとしていて活動的である。また、これまでの研究の成果から、自分の考えを友達に伝える力や友達の考えに共感するなどの姿勢が育ってきている。しかし、未だ指示を待っていたり、教師や友達に頼りすぎたり、言われたことはきちんと行うが受け身であるという面も見られる。

そこで、今年度2年生以上の児童に実施した「学力検査」の結果と前年度実施した「全国学力・学習状況調査」の結果を踏まえ、各学年はもとより、全校的な傾向をとらえ、学力向上を図る取組を「自らの学びを高める子どもの育成」と題して研究を行った。

(1) 学級経営の充実

前年度までの学年・学級経営案は、学校の教育目標及び重点目標をベースに作成していたため、幾分、網羅的な傾向にならざるを得なかった。

そこで、今年度から目標と指導と評価の一体化を図ることを重視し、各担任がこの1年間の目標を短期・中期・長期のスパンで立て、その実現に向けた具体的な手だてを講じ、その都度、評価を行うシステムを構築した。

本校は、二期制を取っているが、前・後期の評価では、大まかな評価に終始してしまう恐れがあるため、評価サイクルを短いスパンで定期的に行うことにより、改善点を明らかにして目標を達成していくという手法を取った。

(2) 授業改善に向けた取組

考える力を育てる少人数指導の取組をこれまで以上に推進させるとともに、今年度は「非常勤講師」の効果的な活用及び北海道教育大学と札幌学院大学の学生ボランティア5名の協力を得ながら、個に応じて習熟を図る指導に対する補助を行ってもらった。

また、6月に研究部が提案授業（道徳）を行い、授業の在り方や授業構築にかかわる諸問題について協議し、今年度の研究のスタートをさせた。全校授業研究および部内授業研究を推し進め、子どもたちの学力の向上ならびに、学習状況調査から見える改善点を明らかにしながら、全校をあげて授業改善に向けた取組を行った。

(3) 教育課程への取組

今年度から、朝読書の時間「読書タイム」と放課後に自由参加し学習する「澄川タイム」をカリキュラムに取り入れた。

読書タイムにおいては、4月21日完全実施してからこれまで、朝8時25分から10分間、どの学級でも静かに読書している状況にあり、落ち着いた朝を迎えている。

また、放課後の澄川タイムにおいては、これまで一日平均30名が参加し、自力学習はもとより、宿題や自分の学習状況に合わせた学習を総務の先生を中心に行っている。中でも、学習に苦手意識をもつ子どもの参加が多くなり、学習の楽しさを感じているとともに、宿題の提出が滞っていた子が忘れずに提出するという習慣化につながってきていることが大きな成果となっている。

さらに、日常の学習においても、着実に学習の伸びを感じさせている子どもが多くなってきていることから、これからは、どの程度、学力（国語・算数）が向上しているのかを正確な数値で確かめる方法を考えることも大切にしていきたい。

全校的な傾向性
をとらえた学力
向上策

目標達成に向け
た指導と評価の
一体化システム

学習状況調査か
ら見えた授業改
善

朝読書と放課後
学習への取組

3 本校における全国学力・学習状況調査等の活用の進め方

(1) 保護者への結果報告と今後の対応策の検討

本校では、「全国学力・学習状況調査」結果の公表はもとより、2年生以上の児童に実施した「学力検査」の結果、さらには、全校児童の学習状況調査を「先生に教えて」アンケートで調査を行い、併せて、保護者に「教育に関するアンケート」と題して、家庭における子どもの学習・生活状況を調査した。

また、この調査の結果を「澄川子ども白書」にまとめ、次年度からの教育活動に生かしていくこととした。その具体的な進め方は、

ア 4月に行った2年生以上の児童の「学力検査」の結果を前年度までの「知能検査」の結果と相関関係を見て分析し、日常の学習に生かしていく具体的な方法を学年・学級経営部内で検討し、研究部と協力して授業改善に向けた取組を行った。

イ 「全国学力・学習状況調査」の結果を受けて、澄川地区3小学校および中学校が集まって今後の対応を協議し、保護者への結果の公表、ならびに、学力向上に関する具体案について話し合った。ここにおいては、学力調査の結果から得た様々な課題について意見交流し、できるだけ具体的な対応策について検討した。

(2) 児童生徒に対する指導資料としての活用

ア 「全国学力・学習状況調査」における学習状況の結果を受けて、6年生以外の児童の学習状況を把握するために、教職員はもとより、児童および保護者に対してアンケート調査を行い、現状を把握した上で、今後の方向性を学年・学級経営部で検討し提示した。そこで明らかになったことは、大きく以下の2点である。

- ・ 家で勉強をしているかの項目については、全国平均を大きく上回っているが、費やしている時間が短く、そのため、なかなか基礎・基本の力が付いていない状況にある。
- ・ 起床時刻と就寝時刻にあつては、大きな隔たりが生じていて、朝遅く起き、夜遅く寝ている生活状況から、家庭における規則正しい生活習慣が確立されていない状況にある。

イ 今年度実施した各種調査の結果を総合的に「澄川子ども白書」にまとめ、次年度の教育活動に生かしていくための準備を行う。

ウ 児童に行ったアンケート調査の結果を受けて、学習はもとより、特に生活においてすぐに改善しなければならない事項（寝る時間や起きる時間等）について指導し、子どもたちの生活に対する意識を高め、自己目標を立てさせ改善に向けた取組を情報交流して、意識改革を保護者に呼びかける。

教育活動に生かす「澄川子ども白書の作成」

全校児童の学習状況調査の結果から学習および生活の改善点

アンケート調査から見た子どもたちと保護者の意識改革の必要性

II 取組の具体化

1 本校における学力・学習状況に関する課題～全国学力・学習状況調査等から～

(1) 国語科における「書くこと」「話すこと・聞くこと」の力を高めるために

① 各学年の漢字学習への取組

各学年における「漢字学習」を子どもの興味・関心に基づいたものとし、子どもの自己選択をキーワードに学習プリントを作成したり、「漢字相撲」や「漢字マラソン」など、子ども一人一人に達成感や成就感をもたせる工夫を図るなど、子どもに漢字学習に対する意欲を高める活動として、全学年を見通した指導の充実を図る。また、家庭学習への取組の一環として、家庭学習プリントを学習の習熟度に応じたものを作成するなどの取組を行う。

② 「書くこと」への取組

国語科での学習はもとより、生活ノートや道徳ノートを活用し、子どもと担任が言葉を通して交流を図る活動を意識的に行う。また、その時に相手意識や目的意識、伝え合うことの大切さを子どもに知らせるとともに、書くことは、自分の考えを整理し、ふり返る基礎になることを実感させていく。

③ 「話すこと・聞くこと」への取組

本校の保護者ボランティア活動である読み聞かせグループ「ルピナス」と連携し、全学級における「朝の読み聞かせタイム」を実施し、物語の楽しさをも

子どもの興味・関心に基づいた家庭学習の必要性

保護者と一体となった取組の展開

とより、聞く活動の楽しさ、感想を話す時間、自分の思いを表現することの大切さを実感させるなど、保護者と一体となった取組を展開する。

(2) 算数科における三領域への取組

① 非常勤講師及び学生ボランティアの活用

習熟度別学習への取組や発展的な学習への取組をT Tを中心とした指導体制づくりを行い、指導の効率化を図った。特に、指導を要する児童に対しては、継続的に同じ指導者をあてることで、その子の成長や変化を克明に把握できる体制づくりに焦点化を図った。

② 放課後学習への取組

指導を要する児童へのかかわりに上記の方策を講じながら、放課後学習（自由参加型の澄川タイム）においても、児童の実態を担任との連携を図りながら、指導に当たった。一人一人の学習状況を把握しながら指導に当たることは、学習意欲を喚起させるばかりではなく、児童も指導者を自分の理解者であることを実感するのである。

澄川タイムでの指導は、基本的には担任外が行うため、その子の学習状況をしっかり把握していなければ、指導できないことも明らかになった。

(3) 家庭での過ごし方への提言

① 前項で述べたとおり、今回の「全国学力・学習状況調査」における学習状況の項目で明らかになったことは、本校の児童が「家では自分で学習している。」のポイントが非常に高かったことである。しかしながら、本校が独自に行った調査では、それに費やした時間は30分程度であることや、就寝時間が全国平均を大きく下回っている（就寝時間の遅さ）ことである。そこで、家庭での学習の習慣化については問題はないが、その内容と時間について問題があることをあらゆる機会を通じて保護者に指摘した。

そこで新たに明らかになったことは、学習の内容の質的問題があったことである。学習の習慣化においては問題はなかったが、その学習の内容に問題があったのである。

- ・家庭学習の内容に問題はなかったか。
- ・家庭学習が行われているという実態把握に問題はなかったのか。
- ・単なる家庭学習の習慣化を目指していたのではないか。
- ・家庭学習は子ども自ら必要なものとして意識されなければ効率化は図れない。
- ・家庭学習の基本が「学習意欲の喚起」にあることを確認し、ねらいを補助的学習から、追求型学習へと転換する必要がある。

等を検討した。その結果、家庭での学習内容がこれまでのドリルの学習から、追求型学習（調べ学習やなぜなぜ学習など）に転換し始めている。

子どもの成長や変化を把握できる体制づくり

理解者であることの実感の必要性

学習の習慣化と学習内容の相関関係に着目

ドリルの学習から追求型の学習への転換

読書活動への取組

子どもの興味・関心が生まれる放課後学習への取組

2 改善策への具体化

(1) 朝の読書タイムの設置

① 学校評価から見た改善策

昨年度の学校評価で問題になったことの一つに、「読書活動の推進」があった。これは、保護者に行った「教育に関するアンケート調査」においても一番低い評価項目となったもので、読書活動に対する取組の見直しが必要となった項目である。

そこで、今年度の最重要課題として、「子どもの読書に関する関心・意欲・態度の育成」に焦点化を図ることとした。

② 学校図書館の開放と地域の図書館の利用

本校に近接している「澄川図書館」との連携を重視し、かかわりがもてる関係づくりを行った。

(2) 放課後学習「澄川タイム」の設置

子どもが自由に参加できる学習環境づくりを行うために、図書館を開放し自由参加という形を取った。そこで一番注意したのが、子どもの参加意識である。放



課後に残って学習するといった意識、つまり、従来からある「居残り学習」観があつては、子どもの学習意欲は高まらないのである。子どもに「澄川タイムに参加したら、何か面白いことがあるぞ。」という興味・関心が生まれるかかわりが必要であった。

Ⅲ 取組例の実際

1 学校を変えた「読書タイム」

(1) 朝の静寂が統一感を生み出す

① 8時25分からの10分間

全学級がこの時間になると静寂に包まれる。子どもたち一人一人にとっては、自分の好きな本を読んでいるだけだが、ここで展開しているのは、時間と空間の共有である。そして、この僅か10分が毎日の学校生活のリズムを創り出すのである。

② 毎週水曜日の教師による読み聞かせ

意図的に読書に対する指導を行うために、教師によるかかわりを位置付けた。このことにより、「今度、こんな本を読みたい。」といった意欲の喚起と読書傾向に価値を見出す働きかけを行った。

(2) 絵本から読み物への転換

教師の読み聞かせが、読み物への興味を引き出し、高学年においては長編ものにチャレンジする姿が見られるようになってきた。



時間と空間の共有が学習のスタートとなる。

教師による読み聞かせの効果

2 放課後学習（澄川タイム）の成果

(1) 学年・学級を越えた交流の場

友達と仲良く時間を共にしたい、今日の学習で理解できなかったことを復習したい、宿題を済ませたい、友達が参加しているから自分も参加してみたらどうなるのだろうか？それぞれの思いは多種多様である。しかし、きっかけはどうであれ、学習の機会は確実に生まれてきているのである。

(2) 多くの先生との出会い

基本的には、担任外が担当していたが、子どもを知ろうということで、ほとんどの担任が指導に当たったことで、子どもたちを多角的に見ることができた。その情報を共有することで、新たな視点で子どもを評価することが可能となった。



学習する機会を生み出すかわり

Ⅳ 研究の成果と課題

1 本校の取組における成果

4月から読書タイムを取り入れてから、学校図書館の貸し出し状況に大きな変化が表れた。当然、読書タイムを始めた頃の貸し出し冊数は、例年と比べ多くなることは予想できたが、夏休み明けの9月の貸し出し冊数が飛躍的に伸びたことである。昨年度までの9月の貸出冊数は、全校で120冊であったが、今年度は1,058冊になった。さらに、本校に隣接している澄川図書館の貸出冊数も昨年度から比べ23%増加している。また、澄川タイムにおいては、当初は高学年が中心に学習してきたが、後期になって低学年、特に、1年生が多く参加するようになってきている。このことは、高学年にとっても大きな収穫となっており、高学年の子どもが低学年の子どもに学習を教えるという光景が随所に表れてきている。

子ども同士のかかわりを生む放課後学習

2 本校の取組における今後の課題

読書することで、本当に学力が向上するのか。また、放課後学習で本当に学力が向上しているのかである。確かに、学習に対する意欲は高まっていることは担任が実感しているところではあるが、数値的にどうかを検証していく必要がある。読書と学力の関係においても同様である。

数値的な検証の必要性